

伊勢物語要解

〔改訂版〕

文学博士

此島正年著

文法解明叢書

文法解明叢書

伊勢物語要解

〔改訂版〕

文学博士

此島正年著

精 堂

改訂のことば

本書は昭和三十年発行以来版を重ねたが、その間読者から種々の御注意や要望があり、著者自身にも意に満たない所が少なくないので、改訂の機会を待っていたところ、こんどその機会を得たことは、たいそううれしい。

改訂に当っては、口訳や説明のわかりにくい所をやさしくし、項目を増して、読者の理解の万全を期するとともに、特に文法については、旧版で専門的なむずかしい説をとり過ぎたのを改めて、もっぱら通説に従うようにした。さらに、現行高等学校教科書に多くとられている段を数段増した。

かくて、本書はまったく面目を新しくし、高等学校や大学受験程度の参考書としてきわめて好適なものになったと信ずる。多くの若い人々の御愛読を望むとともに、さらにいろいろの御批判を下さるようお願いする。

凡 例

一、本書の本文は、鈴木知太郎編「校註伊勢物語」(三条西家蔵の伝定家筆本を影印したもの、武蔵野書院発行)によつて、全編一二五段の中五九段を抜萃したものである。ただし、かなづかいの誤は正し、読みやすいように漢字を多くし、濁点・句読点・引用符等を加えた。

一、本文分析(品詞分解)は、名詞の明らかなばあいを除いてすべての語に品詞名を加えた。品詞記入の方法については、文法略符号表を参照されたい。

一、口訳は、不自然にならない範囲で直訳を旨とし、本文に無い語を補つた部分は()に入れた。なお、歌の枕詞や序詞は「」の中に入れ、必要のあるばあいはそれがどの語にかかるかを示した。

一、語釈・文法は簡潔を旨とした。なお、重要な事項は、重複をいとわず、その出るたびに解説を加えるようにしたが、前にゆづつて省略したばあいもあるので、巻末の「語釈・文法索引」を十分に活用された。

一、本物語は、歌物語の性質上、和歌がその重要な要素をなしているので、巻末に「和歌索引」を附した。

目次

文法略符号表

解題

一 歌物語	一
二 内容	一
三 成立	二
四 伝本	三
五 価値	三
六 参考書	四

要解

一段 むかし、をとこ、初冠して	五
二段 むかし、をとこありけり。奈良の京は離れ	九
三段 むかし、をとこありけり。懸想しける女のもとに	二
四段 むかし、ひんがしの五条に大后の宮	三

目次

五段 むかし男ありけり。ひんがしの五条わたり

に 六

六段 むかし男ありけり。女のエ得まじかりける

を 八

七段 むかし男ありけり。京にありわびて

三

八段 むかし男ありけり。京や住みうかりけむ

二四

九段 むかし男ありけり。その男、身を要なきものに

二五

〔一〕 むかし男ありけり。その男

二五

〔二〕 三河の国八橋といふ所に

二六

〔三〕 ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ

二六

〔四〕 富士の山を見れば

二七

〔五〕 なほゆきゆきて、武蔵の国と

二七

一〇段 むかし、をとこ武蔵の国まで

二八

- 一段 昔男東へゆきけるに……………六
 二段 昔男ありけり。人のむすめを……………七
 三段 昔、武藏なる男、京なる女のもとに……………八
 四段 昔男陸奥に……………九
 五段 昔陸奥にて……………一〇
 六段 昔、紀有常といふ人ありけり……………一一
 七段 年ごろおとづれざりける人の……………一二
 八段 昔なま心ある女ありけり……………一三
 九段 昔、男、宮仕へしける女の方に……………一四
 一〇段 昔、男、大和にある女を見て……………一五
 一段 昔、男、女いとかしこく思ひかはして……………一六
 二段 昔、田舎わたらひしける人の子ども……………一七
 三段 昔、田舎わたらひしける人の……………一八
 〔一〕 昔、田舎わたらひしける人の……………一九
 〔二〕 さて年ごろふるほどに……………二〇
 四段 昔男かたゐなかに住みけり……………二一
 五段 昔男ありけり。逢はじとも……………二二
 六段 昔、男、女のもとにひと夜いきて……………二三
 七段 昔男、はつきなりける女のもとに……………二四

- 三二段 昔物いひける女に……………二五
 三四段 昔男つれなかりける人のもとに……………二六
 三六段 昔「忘れぬるなめり」と……………二七
 三九段 昔西院のみかどと申すみかど……………二八
 四〇段 昔若き男、けしうはあらぬ女を……………二九
 四一段 昔、女はらから二人ありけり……………三〇
 四三段 昔、賀陽親王と申す皇子……………三一
 四四段 昔、男ありけり。人のむすめのかしづく……………三二
 四六段 昔男いとうるはしき友ありけり……………三三
 四七段 昔、男、ねむごろにいかでと思ふ女ありけり……………三四
 五〇段 昔、男ありけり。怨むる人を……………三五
 五七段 昔、男、人知れぬ物思ひけり……………三六
 五八段 昔、心つきて色好みなる男……………三七
 六〇段 昔、男ありけり。宮仕へいそがしく……………三八
 六三段 昔、世ごろつける女……………三九
 六五段 昔、おほやけ思して使う給ふ女……………四〇

【一】	昔、おほやけ思して……………	二三
【三】	この帝は顔かたちよく……………	二七
六九段	昔、男ありけり。その男、伊勢の国に……………	二三
【二】	昔男ありけり。その男……………	二三
【三】	つとめて、いぶかしけれど……………	二四
七六段	昔、二条の後のまだ春宮の御息所と申しける時……………	二六
七八段	昔、多賀幾子と申す女御おはしましけり……………	二八
八〇段	昔、おとろへたる家に藤の花植ゑたる人ありけり……………	二九
八一段	昔、左大臣いまそかりけり……………	二九
八二段	昔、惟喬親王と申す皇子……………	二九
【一】	昔、惟喬親王と申す皇子……………	二九
【二】	皇子のたまひける……………	二九
八三段	昔、水無瀬に通ひ給ひし惟喬親王……………	二九

八四段	昔、男ありけり。身はいやしなから……………	一四
八七段	昔、男、津の国菟原の郡蘆屋の里に……………	一五
【一】	昔、男、津の国菟原の郡……………	一五
【三】	帰り来る道遠くて……………	一五
九六段	昔男ありけり。女をとかくいふこと……………	一五
九九段	昔、右近の馬場のひをりの日……………	一六
一〇一段	昔、左兵衛督なりける在原行平……………	一六
一〇二段	昔男ありけり。歌はよまざりけれど……………	一六
一〇七段	昔、あてなる男ありけり……………	一七
一二三段	昔男ありけり。深草に住みける女……………	一七
一二四段	昔、男いかなりけることを……………	一七
一二五段	昔、男わづらひて……………	一七
語釈・文法索引……………		一七
和歌索引……………		一八
伊勢物語参考図……………		一八

文法略符号表

名詞	代名詞	四段活用動詞	上二段活用動詞	上二段活用動詞	下一段活用動詞	下一段活用動詞	カ行変格活用動詞	サ行変格活用動詞	ナ行変格活用動詞	ラ行変格活用動詞	形容詞	形容動詞	副詞	連体詞	接統詞	感動詞	受身の助動詞	可能の助動詞	自発の助動詞
名	代	四	上二	上二	下二	上二	下一	カ	サ	ナ	ラ	形動	副	連体	接	感	受	可	自

使役の助動詞	尊敬の助動詞	打消の助動詞	完了の助動詞	過去の助動詞	推量意志の助動詞	打消推量意志の助動詞	推定伝聞の助動詞	希望の助動詞	詠歎の助動詞	断定の助動詞	比況の助動詞	格助詞	接続助詞	副助詞	係助詞	間投助詞	終助詞	未然形	連用形
使用	尊	消	完	過	推、意	消推、消息	云	希	詠	断	比	格助	接助	副助	係助	間助	終助	未	用

終	終止形
體	連体形
已	已然形
命	命令形
幹	語幹
(イ)	イ音便
(ウ)	ウ音便
準体	準体形
理由	理由形
枕	枕詞

〔註一〕 数詞は名詞の中に含めた。

〔註二〕 準体(準体形)とは、動詞「いはく」、助動詞「なく」のように、活用語に体言化(名詞化)する接尾辞「く」のついた形をさす。

〔註三〕 形容詞の活用形に「理由形」と記したものがあるのは、形容詞語幹に理由をあらわす接尾辞「み」のついた形である。例えば、「風(を)はやみ」のように。

解題

一 歌物語

伊勢物語は歌物語の代表的作品であるといわれる。歌物語は、竹取物語のような伝奇物語（作り物語ともいわれる）に対比して考えられる物語の種類で、一首もしくは数首の和歌を中心として成立する短い物語である。すでに、古代の古事記・日本書紀・風土記等に、このような歌物語的な部分がかかなりあり、更に万葉集のような歌集にも、ある歌についてその成立の由来を物語的に述べた詞書のついているものが少なくないが、このような形式が、平安時代に入って仮名が行われるようになってから、仮名文によって物語として書かれるようになったのが、歌物語である。

二 内容 伊勢物語は百二十数段（伝本によって段数に多少の差がある）の歌物語から成っていて、各段それぞれに独立した説話であるが、しかも全編を通じて、ほぼ一人の男（「昔男ありけり」と多くの説話の冒頭に紹介される男）が主人公となっており、主としてこの男の恋愛に関する話を集めている。初段は男の初冠（元服）の時の話で、最後の段が臨終の時の事であるのを見ると、少くとも現存流布の伊勢物語は全編を通じてこの「昔男」の一生を取扱った物語であることは疑無い。そうしてそのモデルと昔から考えられているのが、在原業平である。

業平は在原氏の五男で、従って在五中将（中将は近衛中将であつたから）といわれ、父は平城天皇の皇子阿保親王、母は桓武天皇の皇女伊登内親王、天長二年（八二五）に生れ、元慶四年（八八〇）に五十五才

で没した。美男子であつたといわれ、その一生は変化に富んでいたらしい。古今集によつて見ても、藤原氏の圧迫で文徳天皇の第一皇子でありながら皇位に即けなかつた惟喬親王と親交があつたり、後の清和天皇の皇后二条の後や、惟喬親王の妹の恬子内親王とされる伊勢斎宮と通じたり、東下りをしたりしている。古今集には彼の歌が三十首載っているが、その三十首はそのまま伊勢物語に見える。業平は、歌人としてはいわゆる六歌仙の一人で、その歌は極めて情熱的で調べが高く、その成立の由来を記すことによつて、ただちに歌物語となるような要素に富んでいる。

三 成立 右のように、伊勢物語はほぼ業平の一生を主題としており、しかも業平をわざとおとしめて書いているふしの多い点から、古くこれを業平の日記とする説もあつた。「在五中将日記」ともいわれたのはそのためである。たしかに伊勢物語には業平自筆の歌日記のように見える部分が少なくないが、しかし現在の伊勢物語は、業平死後の記事や、業平と無関係の説話もあつて、これをそのまま業平筆と見なすことはできない。なお、本物語の成立について考えるばあいに注意すべきは、古今集との関係である。前述のように、古今集に見える三十首の業平の歌はそのまま伊勢物語に出て来る上に、古今集におけるそれらの歌の詞書と伊勢物語の散文との間に密接な関係のあることは明らかであつて、この点から古来伊勢が先か古今集が先かということが、学者間の問題になつて来たのである。しかしこれについては、現在の伊勢物語は古今集以後後撰集以前に成立したものとし、後人の加筆を除いた「原形伊勢物語」は古今集以前のものと考える説が有力である。

なおここに一言すべきは書名の問題である。伊勢物語という書名は古来大きな謎であつて、種々の説があるが、その注意すべきもの二つを挙げておくと、一は、業平よりやや後の女流歌人伊勢（宇多天皇に仕えた女房）が本書の成立に関係があるためとするもの、今一つは、物語中の特にすぐれた部分とされる伊勢斎宮の記事（第六九段）によるためとするものであるが、後説は、平安朝の古本に、伊勢斎宮の段が最初にある本のあつたらしいことから、かなり信頼できるものである。

四 伝本 伊勢物語は、古来古今集や源氏物語等と並んで、平安文学の傑作として広く読まれ、従つてその伝本も今までに発見されたもので四十数種の多きに達する。このような本文の研究に、池田亀鑑博士の「伊勢物語に就きての研究」（昭和八・九年刊）があるが、これは四十三種の伝本を（一）定家本系統（二）古本系統（三）大島本系統（四）朱雀院塗籠本系統（五）真名本系統の五系に分けている。この中一般に広く用いられているのは、（一）定家本系であり、この系統を代表するものとして三条西家所蔵の伝定家筆本即ち天福本がある。定家が孫の為に天福二年（一二三四）に書写した本で、三条西家蔵のものは実はその模写本であるが、定家筆本を極めて忠実に模写したものである。本書ではもっぱらこれに従つた。定家本に対比してよく参照されるのは（四）朱雀院塗籠本系（略称塗籠本）である。朱雀院の塗籠（倉のこと）におさめてあつたといわれる本で、本文は定家本とかなり違つており、しかも分りやすくなつてゐるので、解釈の上で参考にされることが多い。本書でも少なからずこれを参照してゐる。

五 価値 伊勢物語は、竹取物語と並んで平安初期の物語を代表する作品であるが、竹取物語と異な

る点は、単に散文としてすぐれているというだけでなく、いわゆる歌物語として、歌を中心として物語の展開しているところにある。かくて、長い間歌道の聖典として広く読まれ、後世の文学に与えた影響は極めて大きいのである。その文章も、歌にふさわしく簡潔素朴な文体で書かれ、センテンスがおしなべて短く、同語をくりかえして、一見舌足らずの感じを与えるようでありながら、読み味わうといかにも余情が豊かで、それがまた平安初期の貴族生活の「あはれ」や「をかしみ」を陰影深く表現している。

六 参考書

前述のように、伊勢物語は古来歌道の必読書として広く読まれ、従ってその研究も早くから始まっているが、やはり本当の学問的研究は徳川期に入ってからである。先ず、中世以前の註(古註)を綜合したものととして北村季吟の「伊勢物語拾穂抄」があり、これに対して、はじめて新しい国学の光に当って伊勢物語を研究したものに、契沖の「勢語臆断」、荷田春満の「伊勢物語童子問」、賀茂真淵の「伊勢物語古意」がある。しかし評釈書として今に至るまで広く読まれているのは、宣長門の藤井高尙の「伊勢物語新釈」である。明治以後のものとしては、明治に鎌田正憲「考証伊勢物語詳解」、昭和に新井無二郎「評釈伊勢物語大成」が有名であり、新しいところで、次田潤「詳註伊勢物語」、池田亀鑑「伊勢物語精解」、塚本哲三「通解伊勢物語」、窪田空穂「伊勢物語評釈」、大津有一「伊勢物語の新しい解釈」等がある。なお、解釈の基礎をなす本文の研究に池田博士の「伊勢物語に就きての研究」という名著のあることは、前に述べたが、普通に手軽に使えて便利なものとして、徳川時代の屋代弘賢の「参考伊勢物語」(岩波文庫所収)がある。

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れ

そめにし吾ならなくに

といふ歌の心ばへなり。むかし人は、かくいちはや

きみやびをなむしける。

名	格助	名	代名	格助	下二用
みちのく	の	しのぶもぢずり	誰ゆゑに	乱れ	
下二用	完用	連体	代断未消	準体	終助
そめ	に	し	吾ならなくに		
格助	四、体	格助	名	断終	名
といふ	歌の心ばへなり。	むかし人は、	かくいち		
格助	係助	サ、用	連体		
はやき	みやび	を	なむしける。		

【口訳】 昔、(ある)男が元服して、奈良の京の春日の里に、(そこを)領地とする縁で、狩に出かけて行った。(ところ)が)その里に、たいそうなよくと美しい姉妹が住んでいた。(それを)この男は隙見してしまった。思いがけなく、(こんな)古びた里に、(美し過ぎて)場所柄にふさわしくない様子で、住んでいたで、(男は)ぼうっとしてしまった。(そこで)男自身の着ていた狩衣の裾を切つて、(その布片に)歌を書いて、(姉妹の所へ)送った。その男は(その時)しのぶずりの狩衣を着ていたのであった。

「春日野に生える若紫草をすりこんで染める衣——そのしのぶずりの乱れ模様のように」(あなたがたを)思いしのぶわたくしの心の乱れは、限りの知られないほどです。

と、(年に似合わず)老成したふうでいつてやった。(男がこんなことをしたのは)場合がよろしいことでも思つたのであろうか。(さて、男のこの歌は)

「陸奥のしのぶもぢずり——その乱れ模様のよう」(あなたのほかの)誰のために恋に乱れ始めてしまったわたくしでしょうか。いや、誰のためでもありません、みんなあなたのためですのに。

という歌の心持である(それにもとづいて詠んだのである)。古人は、このようにすばしい風流をしたものである。【語釈・文法】○むかし、もとこ「むかしをとこありけり」という一センチンスで始まる段もある。「をとこ」は語原的には「をとめ」(少女)に対する語で、若い男を指した。平安朝になると、大分、男全体を指す今の意義に近づい

て来るが、本物語の用法には、まだ古意がかなり残っているようである。○初冠―男子十五歳頃に行われる成年式。この式で始めて冠を着ける。○しるよしして―「しる」は「知る」で、自分の土地を治める意。天皇のばあいは、敬語で「知らす・知ろす」といった。「して」は、本来はサ変動詞「す」の連用形「し」に助詞「て」のついたものであるが、すでに一語化して現代語の「で」に当り、原因・方法をあらわす。「よし」は「よりどころ」「縁故」の意。○いにけり―ナ変動詞「去ぬ」に助動詞「けり」のついたもの。「けり」は過去の助動詞といわれるが、「き」のような純粹の過去ではなく、たとえ過去のことであっても、それを現在にまで關係あることとして述べる語であった。従つてそこにおのずから感動・詠嘆の意が加わつて来る。時に詠嘆の助動詞といわれるのは、その極度に強くなつたばあいである。一説に「伝聞過去」とし、「いにけり」を「出かけて行ったということだ、行ったそうだ」と解する。この解釈は非常によく當るばあいが少なくないが、しかしこれだけで「けり」の全用例を説明するには無理がある。○なまめいたる―「なまめきたる」の音便。「なまめく」は語原「生めく」で、立派な本格的な美しさではなく、親しみ馴れることのできるような、やわらかい、なよなよとした美しさで（従つて時には、あだな、色っぽい感じが強くもなる）、そのような美しい様子をしてゐることが動詞「なまめく」であり、それを状态的に表現すれば形容詞「なまめかし」になる。○女はらから―「はらから」は本来同腹の兄弟姉妹だが、後には広く兄弟姉妹を言う。○かいまみてけり―「かいまみる」は語原「垣間見る」で、隙見すること。「て」は完了の助動詞「つ」の連用形で、「てしまふ」の意。○おもほえず―「思ほゆ」の否定形で、下の「古里に……ありければ」を副詞的に修飾する。「思いがけなく」の意。「思ほゆ」は「思はゆ」（ゆ）は後の「る」に当り、上古の自発の助動詞）の変化。○ふるさと―昔榮えて今は衰え古びた里。しかもそれを、自分が昔住んでいたとか生れたとかいふ立場からいう語で、今の「故郷」の意もそこから出来た。○はしたなくて―「はしたなし」は、「中途半端、どっちつかず、（従つて）ばつがわるい、しつくりしない」の意。「ありければ」の「あり」は存在をあらわす動詞で、ここは「住んでいる」意。○まどひにけり―「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形。同じ完了でも「つ」と「ぬ」との相異は、前者が意志的になかつた完了であるのに対して、後者は自然にゆるやかに完了する意。「つ」は他動詞を、「ぬ」は自動詞を受けることが多

い。○まをこの着たりける……」をこの「の」が無ければ、下の「歌を書きて、やる」の主語となり、わかりよい。「の」のあるままで解釈すれば、「をこの着たりける」を「狩衣」の連体修飾語とし、「歌を書きて、やる」の主語としては「を」と「を別に補って考える必要がある。もっとも「をこの」のままで、文全体の主語とする説もあるが、歌ならともかく、散文では無理であろう。なお「歌を書きて、やる」は「歌を書いて、それを送る」意で、「やる」の上は切らなくてはいけない。今の「書いてやる」とは違うのである。○しのぶずりの狩衣まなむ……」狩衣は鷹狩に着用した軽装の衣服。後に常服となり、さらに中世には礼服になった。しのぶずりは、しのぶもぢずりともいい、しのぶ草の模様を植物の汁液ですり出したもの。その模様が髪の毛のように乱れているところから、「乱れる」という語を引出す序詞に用いられる。しかし古来「しのぶ」を陸奥岩代（しほ）の国の信夫郡とし、しのぶずりをその産物と考へるところから、後の歌のように「みちのくのしのぶもぢずり」といわれる（「みちのく」は陸奥。「なむ」は意味を強める係助詞で、「ぞ」と同様に結は用言の連体形になる。従って助動詞「けり」が「ける」になっている。「着たりける」の「たり」は完了の助動詞であるが、語原が「てあり」であることからわかるように、完了してもその結果のなお存在している意をあらわす。従って「着たり」は「着ている」の意。○春日野の……」春日野の若紫のすり衣」は序歌で、「しのぶの乱れ」を引出す役をしている。若紫は若い紫草で、姉妹をこれにたとえている。紫草は紫の染料を根から取る草。「しのぶの乱れ」の「しのぶ」はしのぶずりに思ひしのぶ意が掛詞になっている。○となむおいづきて「おい」の仮名を尊重して「老いづきて」とする説に従ったが、これを歴史的仮名づかいの「おひ」として、「追ひ附きて」もしくは「追ひ継ぎて」とし、「すぐさま」「とりあえず」の意とする説もある。○ついでおもしろき……」「ついで」は本来は順序の意であるが、転じて「折・場合」の意となる。文中の疑問助詞「や」は、口訳では文末に持って行って「か」とする。「けむ」は過去を推量する助動詞で、このばあいは疑問の係助詞「や」の結びであるから連体形。○みちのくの……」古今集恋四に河原左大臣の歌としてほとんどこれと同じ歌が見える。ただ第四句「乱れそめにし」が「乱れむと思ふ」になっている。「吾ならなくに」の「なく」は、「ず」の古い未然形「な」に、用言を体言化する接尾辞「く」のついたもの（連体形）。「に」は逆接の意を持つ終助詞で、「のに」の意。当時この

